詩と散文詩

夜明けの歌

山川建樹

詩と散文詩

夜明けの歌

山川建樹

夜明けの歌　定価　一、〇〇〇円

昭和五十二年十月二十五日　印刷
昭和五十二年十一月十五日　発行

著者　山川建樹
岡山県岡山市畑鮎二七三〇

製作　中央公論事業出版
東京都千代田区丸の内丸ビル5階

印刷　藤印刷
製本　藤巧社

目次

詩集

夜明けの歌 2
詩 6
鱒 8
観照 11
秋 14
出雲の大宮 15
松 18
山の花 21
緑蔭 24
旅情 27
愛するもの 30

母の祈り 32
生誕歌 34
生命の歌 40
夕飯の歌 43
狼 45
独裁者の歌 48
ビートルズ 56
祖国の歌 61
土の歌 77

散文詩・その他

その時、君なら 90
狩人 93
奇妙な行列 95
ある馬鹿の話 98
犬と飼主 102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

北極星 104
花と子供 106
長い眉毛の老人 108
出港 126
びっこの花嫁 128
ある農夫の死 132
林檎の歌 135
美しい手 143
夏の夢 145
出雲大社 148
くたばれ、仏教 150
淫欲の怪物 160
「禁断の果実」の神話 162
記念碑 164
白鳥 167
一片氷心在玉壺 169

ある日、神さまが　170
おゝ、この蛆虫のごとく　173
若者よ　176
磯の朝　180
神代　182
少彦名命　188
あとがき　195

詩

集

夜明けの歌

月のしずくの漏れて滴(したた)る
青白い林のなかを
イヴは走る。

真珠の首飾りをオリーヴの枝に掛け
銀の指環を百合の花のなかに置き
沢山の宝石を花と草の上に鏤(ちりば)めて
イヴは走る。

啼きやまぬ夜の鳥の声が木魂し
みどりの梢のかすかに揺れる林のなかを

靴を薔薇の繁みに投げ捨て

靴下を李(すもも)の若枝に掛け
ガウンを桜の枝に
シュミーズを林檎の枝にうち掛けて
裸になってイヴは走る。

それを追いかけてアダムが走る。
赤松の枝に、上着をうち掛け
ネクタイとシャツとズボンを
それぞれ木の枝に掛けて
裸になって、アダムも走る。

啼きやまぬ夜の鳥の声が木魂し
月の光の青くながれる林のなかを
艶(なま)めく肌をくねらせて
人魚のように二人は走る。

林の奥には
禁断の赤い果実(このみ)が
枝もたわわにみのる樹の下に
二人のための
愛の饗宴(うたげ)が待っていた。

明くる朝、林のあっちこっちの枝々で
シュミーズや、ガウンや、靴下が
天人の羽衣のように微風(そよかぜ)に揺れ
宝石は、きらきらと朝日に輝き
天然の林は
アダムとイヴの脱ぎ殻で飾られた。

そして、禁断の果実の下で
アダムとイヴは、眩しい朝日のなかで
はげしく抱き合って泣いていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

人間の罪の深さを思い知ったのか
又は、愛の感激の
あまりにも劇しかったそのためか。

かれらの重みを載せて、石は吐息し
ためにざらめき
べっとりと大きく、真紅の血潮で濡れていた。
二人は愛の証しを
色濃く、大自然のなかに刻みつけたのだ。

この燃えさかる生命の奔流は
一条の火の帯となって
黄金(こがね)の波のきらめく、はるかな
銀河の岸へと注がれてゆく。

詩

美しい言葉は
青い空から舞いおちてくる
一ひらのピンクの薔薇の花びらのように
ひらひらと、音もなく
この心の上に落ちてくる。

真実の言葉は
遙かな昏冥の空から
矢のように飛んでくる白い鳥の姿して
羽音もかすかに
この胸の上に舞いおりる。

熟して重い秋の実が

待つ人の掌に落ちてくるように
私は、それらの言葉を
重たく尊く受けとめる。

曙(あけぼの)の光と露で編みなす籠に
燦々と盛り飾る詩の華は
原始の炉に燃えさかる炎や、白い雪。
神の庭に拾う金の星。
歌声さわやかな生命の緑、思想の響き。
永劫の影をつらぬき
一筋きらめく宇宙の精髄。

鱒

銀鱗を朝日に輝かせて
漣(さざなみ)たつ秋の河を
矢のようにさかのぼる鱒(ます)。

神の与えた繁殖の使命を腹に抱いて
ひたすらな情念に燃え
まっしぐらに突き進む鱒よ。

彼岸ざくらの花が揺れ
空にかがやく雲が飛び
風吹きおこる春浅い山の家に
今朝、いそいそと嫁いできた娘。

初々しいほほ笑みに朝日は輝き
ピチピチとはちきれる敏捷な肢体に
健康は躍り
かの女は、迎える人らの喜びの
どよめきの渦に包まれている。

銀鱗を朝日に輝かせて
漣たつ秋の河をさかのぼる鱒のように
春の息吹きを肌に込めて
今朝、いそいそと嫁いできた娘。

両親と大自然の祝福のなかに育って
虚偽も、退廃も知らず
原始の逞しい生命の火が
その小さな胸に、いま赤々と燃えている。

やがて訪れる産児には
太陽を産みおとすほどの喜びを感じ
なにげない優しさやほほ笑みが、かの女の周囲に
幸せの花ひらく楽園をつくるであろう。

神聖な使命への自覚が
かの女の頭上に、黄金の輪光を放って
人々の胸に迫った。
おゝ、このかがやく娘よ！

銀鱗を朝日に輝かせて、漣たつ秋の河を
生命の讃歌高らか
矢のようにさかのぼる鱒の
ここは行きつく産卵の砂場だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co